

洲之内徹の書いた日中戦争

秋山洋子

I はじめに

本論のねらいは、洲之内徹が日中戦争時期の中国を舞台に書いた小説を題材に、彼が晩年に書いた一連のエッセイを補足資料として、ひとりの作者の眼を通した日中戦争とその中で生きた人間について考察することである。

洲之内徹という名前は、一般には美術エッセイの書き手として、あるいは絵画コレクターとして知られている。「気まぐれ美術館」というタイトルで『芸術新潮』に1973年から1987年の急逝まで書きつづけられた美術エッセイは5冊の単行本にまとめられ、それに先立つ『絵のなかの散歩』とともに多くの愛読者を得ている。銀座で小さな画廊を経営しながら、どうしても売る気になれず手元に残していった絵画は、「洲之内コレクション」となって、現在は宮城県美術館に収蔵されている¹。

しかし、彼が日中戦争時に中国山西省太原で洲之内公館と呼ばれる諜報機関を運営していたこと、戦争直後は作家になることを志してその体験を小説に書いたことはあまり知られていない。私がそれを知ったのも最近のことで、日本軍の山西省における性暴力調査にたずさわっている「中国における日本軍の性暴力の実態を明らかにし、賠償請求裁判を支援する会」を通じてであった。同会の活動の集大成である『黄土の村の性暴力』（2004）には、池田恵理子による論文「田村泰次郎が描いた戦場の性——山西省・日本軍支配下の買春と強姦」が収録され、また、2009年3月にはそれを発展させたシンポジウム「中国山西省・戦場での日本兵：田村泰次郎の戦争文学から」が開催された²。これらの資料の中に、田村が兵士として山西省に滞在していた時期に親交を持った洲之内徹が登場する。田村は、日本軍の拠点であった太原の洲之内（小説では須田）の家には、「いつも香り高いコーヒーがあり、名曲のレコードが鳴っていた」と書いている³。

田村と洲之内の交流は戦後の日本に引揚げてからも続き、田村は1959年に「現代画廊」を開設し、洲之内に支配人として経営をゆだねた。これに先立つ戦後期、洲

之内は三度芥川賞の候補になりながら入選を果たせず、友人と始めた事業にも失敗して生活に困っていたという。田村からの画廊経営の誘いは、文学の道に挫折した洲之内の後半生に、画廊経営者・コレクター・美術エッセイストという独自の道を開く転機となったのである。

本論では、日中戦争を扱った洲之内の作品をとりあげるが、文学として論じることを主眼とはしない⁴。ここで試みたいのは、日中戦争がもっとも熾烈に戦われた場所のひとつに身をおいた洲之内徹が、そこで何を見たのかを、中国文学・歴史に関心を持つ立場から探ってみることである。そのなかでも、日本軍諜報機関で働く中国人の横顔が描かれている洲之内公館を舞台にした連作と、戦場における犯罪を加害者の側から描いた「砂」とを、それぞれとりあげて論じてみたい。

II 洲之内公館三連作：「鶯」「流氓」「秦の木の下」

1. 中国における洲之内徹

洲之内徹は1913年に松山市に生まれた。松山中学を卒業、1930年東京美術学校建築科に合格して上京し学生生活を始める。翌年プロレタリア美術家同盟に参加して実践活動にかかわるが、1932年7月に逮捕され、退学処分になる。釈放されて松山に戻り活動を続けるが、33年再逮捕、松山刑務所で15ヵ月の獄中生活を送り、実践活動はしないと誓約して懲役2年執行猶予5年の判決を受け釈放された。左翼活動と「準転向」の体験は、洲之内にとって生涯にわたる傷跡となっている⁵。

釈放された洲之内は、松山で同人誌『記録』に依って文筆活動をしていたが、1938年秋、北支派遣軍宣撫官に応募して中国にわたった。釈放後の洲之内には特高警察の監視が続いており、いずれ召集されれば軍隊内で過酷な扱いを受けることは目に見えていたので、いっそ軍の懷中に活路をみいだそうという選択だった。宣撫官というのは占領地の民衆工作にあたる軍属で、現地の治安に目を光らせる憲兵が「ムチ」であるとすれば、宣撫官は民衆を懐柔する「アメ」の役割といえる。アメとムチが一体となって日本軍の占領政策を支えていたことはいうまでもない⁶。

「宣撫班が一年あまり、特務機関にいた時代が約一年あって、その後は参謀本部の対共産軍情報が仕事であった。初め北京の方面軍参謀部へ呼ばれて対共調査班に入り、やがて、隷下の軍や兵団にも調査班を設置することになったとき、保定、石家荘と順次に私が調査班を作って行って、最後に山西省の太原に第一軍司令部の対共調査班を作ると、自分でそこへ腰を据えて、最後までそこにいた。昭和十九年の

秋、教育召集で運城の輜重隊に入っていたときだけが本物の兵隊で、あとは軍属である」⁷。

この太原に作られた調査班が、田村泰次郎が描写している洲之内公館である。田村のような一兵卒にとっては、前線にありながら文化の香りがする洲之内公館はオアシスのような場所だった。しかし、主人である洲之内の心境は暗澹としていた。

昭和十八年といえば、現地軍が「十八春大行作戦」「十八夏大行作戦」というふうには、続けざまに、太行山脈の共産軍の根拠地に対する、いわゆる燼滅作戦を強行していた年で、共産軍が日本軍の「三光作戦——殺光、サンゴワン 焼光、ジャアゴワン 滅光、ショウウゴワン 殺し尽し、ミエゴワン 焼き尽くし、滅ぼし尽す」⁸と呼んだ作戦であるが、その作戦のための作戦資料を作るのも私の任務のひとつで、それは憂鬱とも何とも言いようのない、厭な仕事であった⁹。

このような日々の中で、唯一の救いだったのが、知人の新聞記者が持っていた画集の中の「ポワソニエール」という絵であった。魚を入れた籠を頭に載せたフランスの漁婦を描いたこの小品は、全体が青いトーンでまとめられ、見るものを吸い込むような静けさをたたえている。洲之内にとってこの絵を見ることは、失われた良き日々への郷愁をかきたてられると同時に、そのような本源的な日々への確信を取り戻させてくれることでもあった。「頭に魚を載せたこの美しい女が、周章てることはない、こんな偽りの時代はいつかは終わる、そう囁きかけて、私を安心させてくれるのであった」¹⁰。

引用したエッセイには、終戦後さまざまな経緯をたどって「画廊の番頭」になった洲之内が、偶然この絵の実物にめぐり合い、持主との長期にわたる駆け引きの末やっとな譲り受けて大雨の中をかかえて帰るまでの顛末が語られている。こうして「ポワソニエール」は洲之内コレクションの代表作となり、中国時代の洲之内と美術エッセイストとしての洲之内をむすぶ環として存在することになったのである。

太原における洲之内の調査活動は終戦まで続いた。戦局が悪化した1944年になると、左翼活動歴を持つ人物を使ってはいけないという軍の通達が出されて形の上では民間の調査所となるが、スタッフは公館時代から引継がれ、費用も引き続き軍から供給されていた。

1945年の敗戦により、調査所は太原に進駐した閻錫山系国民党軍に接收され、洲之内も国民革命軍第二戦区政治部下将参議という肩書きで中国軍に編入された。翌46年春、辞表を出して妻子と共に日本へ引揚げた¹¹。

2. 洲之内公館の中国人調査員

美術エッセイ以外の洲之内徹の作品は、長く絶版になっていたが、2008年『洲之内徹文学集成』として集大成された¹²。そのうち日中戦争期を背景にしたものは5編¹³あり、その中の3編が洲之内公館を舞台にしている。このうち、執筆順序とは逆に、「棗の木の下」では軍直属の洲之内公館時代、「鳶」「流氓」では形の上では軍から離れて独立した1944年から終戦にかけての時期が語られている。

3編を通しての主人公／語り手は、前者では古賀、後二者では野島となっているが、軍直属機関の長であると同時に、左翼活動歴のために憲兵隊の監視対象でもあるという、洲之内自身と同じ立場に設定されている。戦争に対する批判を持ちながら、軍の機構の中に居場所を見つけた矛盾を生きる彼の口癖は「どこに行ったっておんなじさ」であった。

矛盾と言ひ、偽りと言ったところで、この戦争を批判しながら、その中で生きて行くためにはどうしようもなかった。それぞれが、それぞれのしかたで、その苦しみに耐えようとしていた。狂信的な、大仰な身振りで軍人に迎合したり、高飛車に、神がかりの信念を振りかざしたりしている連中にしても、そうして自分の内部の痛みから逃れようとしているのだと見られないこともない。しかし、そういうことは野島の柄ではなかった。軍人たちが要求するだけのものを黙って果すと、野島は、あとは彼自身のひそかな生活の中へひっこんで暮した。街の楽器店で古典物のレコードを買い揃えたり、本屋をまわって新刊書を集めたりした。彼の部屋へ行けば、いつでも本物の洋酒や、匂いのいい珈琲が飲めた。ぎっしり詰まった本棚や、レコードのキャビネットに囲まれて過ごす時間が、仮初の、脆いものだということを承知の上で、野島はその生活に執着した。この生活もまた、偽りの上に架けられているにはちがいがなかったが、それでも、この生活を失っては、身を落ちつける場所は他にない¹⁴。

この転向左翼知識人の自画像も分析の対象として興味あるものだが、本論では深く触れない。ここでは、洲之内公館で働く人々、とりわけ中国人調査員に注目したい。

洲之内公館は軍司令部直属の諜報機関であるが、その仕事は文書資料や統計などを扱って、共産軍の動きを総合的に把握する地道な作業が中心である。したがって中国語を読む能力が必要であり、調査員はほとんど中国人だった。かれらは日本軍

の捕虜の中から引き抜かれてきた者で、共産党や国民党の党员も少なくなかった。そんな過去を持つ調査員と主人公との交流が、連作のひとつの柱となっている。

中でも、洲之内がもっとも愛情を持って描き、読者の印象に残るのは、「鳶」から「流氓」に続いて登場する馮英だろう。彼は山西省南部で共産党の県委員をしていた男で、憲兵隊につかまって銃殺されるところを、出張で来ていた野島に貰い受けられた。公館に来た当初は陰気に押し黙って、押収された八路軍の図書に読みふけているばかりだったが、3ヵ月後、突然、家族の安否を確かめるために帰郷したいと申し出る。もう戻ってはこないだろうと予想しながら野島は許可を与えるが、馮は意外にも2週間後に戻ってくる。「馮英がほんとうに家族の安否を尋ねるために帰ったのか、それとも、党活動に復帰するつもりで帰ってみたものの、既に留保期間が過ぎて、党籍が抹消されていたというような事情でもあったのか、そういうこともあると聞いていたが」¹⁵、野島は黙って迎え入れた。それから3年を経て、いまや馮英は野島の片腕として調査所の運営に欠かせない存在になっている。

日本軍の諜報機関で働くのは、日本人にとっては少なくとも国のためという名分があるが、中国共産党员や国民党员にとっては、思想と国を同時に裏切る行為である。彼らがその一線を越えるきっかけとして、前記のように、ひとたび党との連絡が絶えた者にとって復帰が困難な事情があった。それと同時に「激しく働くことに慣れた彼等は、なんにもしないでいることはいちばんの苦痛なのである。逃亡しない限り、かれらはいつかは働きはじめる」¹⁶と洲之内は見通してもいた。

日本軍の情報工作という、自分の思想信念に背く仕事に従事している野島と馮英の間には、言葉に出さないが互に通じるものがあつた。「二人のあいだには、共犯者が、お互いに知っていて触れようとしない犯罪の記憶のようなものがあつた。あからさまに追求されるとすれば言い逃れのできないうしろ暗さがあり、そのうしろ暗さのために親しみあつている。そういう関係が二人のあいだにでき上がっていた」¹⁷。

野島は、諜報機関の責任者としての自分の仕事を、情報よりも調査の面に限ることで気持ちに救いを得ようとしていたし、馮英のほうでも、彼が協力させられる調査という仕事の客観的な性格、間接的な、非政治的な性格に言いわけを見出しているようだった。「鳶」の冒頭には、それを象徴するエピソードが置かれている。山西省の土地制度実態調査の項目作りを終えた馮英が、日本軍が討伐で押収してきたレーニンの『ロシアに於ける資本主義の発展』の読みかけのページに手をはさみながら、野島に向かって、レーニンはこの本を書く資料として、ツァー政府の地方組織であるゼムストヴォの統計を利用した、自分たちが今やっている調査も、将来そんな役

割が果たせないだろうか、と言う。これを受けて野島も「そうだよ、だから、そいつをやろうじゃないか」と調子よく答える。

自分の思想を裏切る仕事であるとわかっていながら、統計調査という仕事の面白さにそれなりにのめりこみ、まわり回ってそれが自分の理想とする方向への礎石のひとつになることに、一筋の藁をつかむような希望を託す。戦争の終わりも見えてきた1944年、日本と中国の青年（洲之内もまだ30代に入ったばかりである）のこんな姿もたしかにあったのだろう。

調査員の中には、転向を装いつつ元の組織と連絡を保ち、秘密活動を続ける者もいた。「鳶」に登場する温迪泉は、馮英とは対照的に描かれている。在米華僑の二世である温は、父の故郷である広東に戻って抗日運動に身を投じ、延安の軍政大学を経て八路軍で偵諜参謀を務めていた。激戦の中で捕虜となり、熱病にかかって病院に送られ、中国人新聞記者に引き取られて、現地知識人のサロンとなっていた調査所に入出入りすることになる。彼を調査員に推薦したのは馮英だが、同僚になると、外国生まれで金に不自由なく育った温と、農民出身で地道な地方工作を担ってきた馮とは肌合いがあわず、野島を悩ませることになった。

「鳶」の物語は、この温をめぐる展開される。温の秘密活動は軍に露見し、野島は彼の身柄の引渡しを求められるのだが、それに反発して温夫婦を脱出させる計画を練る。さいわい親しくしていた新聞社の支局長が北京転勤になると知り、社の使用人として同行してくれるよう頼み込む。俠気のある支局長は、事情は詮索せずに温夫婦の身柄を引き受けた。こうして、野島は軍の鼻を明かし、温は無事太原を脱出した¹⁸。

別れぎわに、温は野島に「戦争が終わったら広東へ来てください、案内します」という。

もう二度と逢うことはないだろう、お互い言っておきたいこと、話しておかねばならぬことは他にあると思いながら、却って他愛もない話題ばかりが続いたが、のんびりした会話の中から、ダウンジャンイーホウ打完戦以後（戦争が終わったら）——その言葉だけがとびだしてきて野島の胸に響いた。その言葉は、ちかごろ事務所の連中のあいだでも、なにかにつけてよく使われるようになっていた。誰もが戦争の終末の近いこと、終らずにはいないことを漠然と感じていたが、それがどんなふうにやってくるかは想像できない¹⁹。

洲之内配下の調査員たちが迎える終戦は、「鳶」の続編というべき「流氓」の中に

描かれている。日本のポツダム宣言受諾のニュースを野島に伝えたのは、延安の新華社から前線の支局に発する通信を短波受信機で傍受していた鄭だった。野島はその足で軍司令部へ報告に行くが、主任参謀は会議で不在、上官だった大尉の反応も鈍い。事務所に戻った野島は、馮英と相談して銀行預金を全部おろし、事務所にある現金と共に所員に分けた。

その晩から、調査員は二人、三人とひっそり去ってゆき、数日後には車夫やボーイたちが残るだけになった。去るべきものはみんな去った後で、馮英が別れを告げにきた。馮英が去って行ったのは終戦の放送が行われる前日とされている。日本がポツダム宣言受諾を決めたのは8月9日の御前会議、中立国を経て受諾を伝えたのは10日である。洲之内事務所の情報入手と撤退とは、さすがというべき手際よきで行われた。去って行く調査員たちは何も言わず、野島もまた何も聞かない。先行きのわからぬ情勢の中で、聞いたところで意味がないのは互にわかっていることだった。

馮英や温迪泉が野島と再会することはなかったが、「流氓」には別の部下との再会が語られている。康林と呼ばれるその男は、もと晋察冀辺区の国民党書記で、捕虜収容所にいたところを野島がもらい受け、民間調査所になってからもついて来たが、あるとき郷里に帰るといって出て行った。「郷里へ帰るといっものは表向きで、戦区へ帰ることはわかっていたが、それを承知で野島は帰した」²⁰。この康林は終戦後、国民党軍の将校として野島の前に姿をあらわす。国民党軍は野島の調査所を接收し、野島は国民党軍に半強制的に編入されるが、戦犯や捕虜としてではなく、将校待遇で迎えられる。その陰には、調査員であった康林の意向が働いていたことが伺える。

さらに、小説には登場しないが、洲之内公館では中国人ばかりでなく、朝鮮人も働いていた。

戦争中、日大出の李君という青年と、北京から保定、石家荘、太原と、数年に互って起居を共にしながら、いっしょに仕事をして歩いた。もうひとり、これは太原に落ちていてからだ、柳君という青年が加わった。この青年は満洲生まれで、間島ソビエトが潰されたとき、両親に連れられて、黒竜江を渡ってソ連に逃れ、ソ連で成長した。モスクワのクウトベエ（植民地共産大学）で教育を受けた後、延安に派遣され、更に東北（満洲）の工作に赴く途中、日本軍の捕虜になって私のところへ送られてきたのだったが、私とはよく気があって、いい相棒であった²¹。

植民地朝鮮にルーツを持つ二人の青年が、一人は宗主国日本で、一人は「革命の祖国」ソ連で教育を受け、中国の太原で出会って日本軍諜報機関で共に働いた。洲之内の伝聞では、その後二人は北朝鮮の政府要人になったというが、その間にはさらに国共内戦、朝鮮戦争という戦乱がある。ドラマの筋書きにしても波乱万丈にすぎない物語である。一方は物静かで、他方は明朗闊達だが、議論になると譲らなかったという二人を、洲之内は懐かしげに回想している。

二人の名が登場するエッセイは、画家曹良圭の回想である。曹良圭は植民地時代の朝鮮に生まれ、李承晩政権下の韓国の政治的弾圧を逃れて日本に密航し、マンホールや倉庫などを好んで描いた画家だが、1960年に帰還事業で北朝鮮へ去った。画廊に立ち寄っては独占資本主義体制批判から議論を始めたという曹の、日本の画家にはない骨太な人柄を愛していた洲之内は、帰還後消息の絶えた彼の身を案じている。曹が残っていた「マンホール B」は、小品の多い洲之内コレクションの中では違和感をおぼえさせるほどの大作であり、それがかえって曹に対する洲之内の思いの強さを感じさせる。そこには、議論好きの気質を曹と共有する太原時代の部下たちへの思いも重ねられているのだろう。

このように、洲之内公館をめぐる三連作には、心ならずも自らの思想を裏切り、その重さに耐えつたお生きようとする人々が、民族の隔てを超えて心を通わす情景が描き出されている。日本の側からも中国の側からもほとんど描かれたことのない、しかしその時その現実を生きた人々の姿は、洲之内徹でなければ書き残せなかったものである。

Ⅲ 戦場の犯罪を描く「砂」

1. 日本兵による略奪、殺人、強姦

洲之内徹の戦争文学の中で、発表順では4作目となる「砂」は、洲之内公館を舞台にした連作とはかなり趣が異なっている。おなじく日中戦争を描いてはいるが、時期は少しさかのぼって1939年、場所も山西省ではなく河北省 D 県となっている。洲之内の経歴をみると、1937年に中国に渡り、宣撫官として1年勤めた後、河北省大名県で特務機関員をしたとあり、この時期が「砂」の背景と符合する。

主人公は D 県に駐屯する W 大隊本部直属の工作隊の班長である世古軍曹で、洲之内の経歴と重なるが、大連生まれの満洲育ちと、経歴にはフィクションが加えてある。工作隊というのは現地情報収集のための「中国人の密偵の集まり」で、作戦

中には民間人を装った便衣隊として偵察などの任務を与えられる。

「砂」は、W 大隊による「討伐作戦」²²の一部始終が、工作隊の隊長として従軍した世古の目を通して描かれている小説で、筋というほどの筋はない。そこで具体的に語られているのは、討伐作戦中に行われる略奪、民間人殺戮、強姦といった、戦時国際法や日本軍の軍規でも許されない数々の不法残虐行為である。それらの事件を通じて見え隠れするのが、工作隊に配属された憲兵である蛭子兵長に対する、世古軍曹の怖れと敵意の混った心理であり、それが「砂」のモチーフとなっている。

それを具体的に見ていこう。日本軍による不法行為の中で、罪の意識もなく日常的に行われるのが略奪である。現地住民からの情報収集が仕事である工作隊は、住民が逃亡して無人になった地域ではすることがないので、本来なら討伐に加わる必要はない。それなのに常に討伐作戦に加わるのは、「自分の食い扶持を稼ぐ」ためであった。

この地方はもともと豊かな農村であり、日本軍の進駐後まだ二年と経っていない当時、物資はかなり豊富にあった。農民が穴倉や土の下に隠している物資を、中国人の工作隊員たちは独特の勘で発見し、これも略奪した馬や車に積んで持ち帰る。県城に戻ると、余分な品物は、それを積んできた馬や騾馬もろとも売り払う。収益の一部は隊員に分配され、残りは工作隊の経費という名目で、世古の手を経て直属上官の懐に入る仕組みだ。

日本軍の戦場での略奪は耳新しい話ではないが、ここには本国からの補給が可能だったはずの時期から、組織的に行われていた略奪行為がつぶさに描かれている。主人公の世古自身も、その恩恵の享受者である。

「隊長」として、そしてまた隊の中のただひとりの日本人として、彼は、少なくとも表面は忠実この上もない隊員たちにかしずかれ、宿営地に入ればまっ先に格好な家屋を捜させ、炕に火を焚かせ、お手のものの鶏や豚で汁を作らせて飯を食い、ときには大鍋に湯を沸かさせて「入浴」をする。隊員たちの略奪を許し、彼等の着服を大目に見てさえおれば、そうした他愛のない愉悦は、いつでもよろこんで提供された²³。

現地民間人に対する殺戮も、戦地の日常的風景として語られる。殺人者には、主人公の世古自身も含まれる。偵察にでた工作隊は、中国軍に糧秣を届けて帰る途中の農民たちを荷馬車ごと捕獲する。かれらに荷馬車を追わせて戻る途中、老いた農夫が追っている最後尾の馬車が遅れがちになり、指揮をしていた世古はいらだつ。

よろけながら目の前を走っている老人の惨めさに、世古は腹が立ってくる。相手の惨めさが、惨めさゆえに憎悪を掻き立て、憎悪はやがて殺意に変わる。世古は引き金を引き、老人は檻褌のように地面にくずおれた。

本部に戻った後、炕の上に横になった世古は、自分自身が突然射殺され、闇の中に横たわっている農夫であるような気がしてくる。そこでさらに、自分が以前目撃した、若い兵隊が家の門口に腰かけていた老婆に歩み寄り、だしぬけに撃ち殺した情景を思い出す。それを目にしたときの世古は、途方もなくいやらしいものを見たようにぞっとした。しかし、「自分はあるとき、動機のない殺人に竦っとしながら、その陋劣なものに誘われたのではなかったか。そして俺自身、その機会が来たとき、全く無意味にあの老人を撃ち殺した。殺す必要はなかったが、必要がないから俺は殺したのだ」²⁴。

殺人よりもさらに紙数を費やして書き込まれているのは強姦である。「砂」の中には、3件の強姦が、そのうち2件は世古の回想として、最後の1件は小説の時間内での世古自身の行為として描かれる。

最初の回想は、世古にとって初めての強姦体験である。場所は討伐に出て駐屯した村、被害者は纏足をした若妻らしい農婦である。ここでは、牛を追って逃げていく二人の女を目にした場面から、二人を呼び止め保護するかそれとも……とためらう一瞬があり、年配の女の逃走をきっかけに強姦に踏み切るまでの経緯、さらにその体験によって世古の欲望が呼び醒まされる状況までが、こと細かに描写されている。

この経験をきっかけに、世古は宿営地に入ると女をあさる、常習的な強姦者になった。第二の回想は、他に女が見つからなくて「兵隊たちの欲望の対象となる年齢をすぎた」炊事婦を犯すが、無抵抗で無反応な相手の肉体に自分の欲情がさめていくのを感じ、相手を陵辱しているという想念によって欲望をかきたてようとする。ここでは、性的欲望を満たすための強姦のはずが、逆に強姦という犯罪行為を意識することによって性的欲望をかきたてるという倒錯の過程が描かれている。

第三の、小説の時間の中で行われる強姦には、この小説のモチーフである世古軍曹と蛭子兵長との微妙な関係がからんでいる。工作隊が捕えてきた農民の中に、農会主任とその妻がいた。夫は一行の中心人物とにらまれて中国軍の動静について尋問され、答えられず拷問を受けて息絶える。夫が死んだ以上は妻も処分せよという命令を受けた世古は、どうせ殺すならその前に自分が犯そうと考える。夫の死を知らない妻は世古に向かって夫の命乞いをし、彼の欲望に気づくと、夫の生命を買い

戻す代価を支払うつもりで要求に応じる。ことをすませた世古は、自分を捜しにきた蛭子の呼び声にうろたえ、女を殺せと命じる。

そのあと世古は、自分の強姦を蛭子に知られたのではないかと気にする。「女を犯したあの夜の、ちょっとした時間の手違いが、とりかえしのつかぬ後悔になって世古の脳裏に喰いこんでいる」²⁵。ここで注目すべきなのは、彼が後悔しているのは、「女を犯した」ことではなく、「ちょっとした時間の手違い」によって憲兵に弱みを握られたことだということだ。

結局、蛭子兵長は最後の戦闘で戦死し、世古の不安は解消する。のどかな春日和の中を討伐隊が県城に帰還するところで物語は終わる。

2. 戦場犯罪者の心理と作者の位置

以上でわかるように、「砂」は、中国における日本軍の戦時暴力を、加害者の側から詳細に、具体的に語る小説である。日本軍による暴力、とりわけ戦時性暴力の問題は、ここ20年ほどの間に被害者による告発や、被害者からの聞き取りなどが行われ、その実態が明らかになれつつある。しかし、加害者側の証言は限られており、その意味でこの小説は、貴重な資料のひとつである。

しかし、この小説は、向き合うことをたじろがせるような、おぞましき、後味の悪さを持っている。もちろん、描かれている内容が殺人や強姦である以上、爽やかな読後感など期待できるわけではない。しかし、この小説の後味の悪さは、書かれている内容そのものもさることながら、むしろ語り方そのものにある。その原因は、主人公世古の設定のしかた、彼のモノログとして語られることの内容にある。

たとえば、前節で引用した最初の強姦は、次のように語られる。

その後、世古はなんどもそのようにして女を犯したが、最初のその女の躰のうちに、彼はもう長い間忘れていた、あの兵隊相手の慰安婦たちの手摺れた肉体にはない、ある感覚を探りだした。その感覚は、その瞬間に、唐突に彼に甦った。女とはこういうものだった。恐怖と敵意に硬ばり、屍体のように彼の下に投げ出されているが、やはりこの肉体は新鮮であった²⁶。

ここでは、世古が強姦の常習者となったきっかけを説明している。これまで相手にしていた「兵隊相手の慰安婦」の肉体と、強姦の被害者である若い人妻の肉体とを対比して、後者が世古に忘れていた感覚を甦らせたというのだ。自分たち兵士の

性の対象として存在させられている「慰安婦」の肉体を「手摺れた」と侮蔑する感覚は、ひるがえって兵士たち自身の精神の荒廃を映し出している。その感覚を許しがたいと怒ってみても空しいが、それでもまだこの部分は、女を母と娼婦に分断して一方を崇め他方を侮蔑してきた近代文学の流れの末につらなるものとして、とりあえずの理解は不可能ではない。しかし、それと対照されて、世古の官能を呼び醒ましたのが、被害者の「恐怖と敵意に硬ばった肉体」であったとなると、そういう理解さえ不可能になり、倒錯した性犯罪者の心理としか読むことができない。その世古の感覚が異常なものとして析出されているのではなく、作者の目からは自然なものと同容認されているように読めることが不気味である。

洲之内は強姦の動機について、もう少し違った角度からも説明している。

自分の手の中に、その生命が握られていると思うものに対する心の働きかたには、どこかで性の衝動に通じるものがあるのだった。ひとりの生きている人間に対して、どんなことでもできるという残酷な思想が、性的な衝動を誘発する。討伐隊の兵隊が女を陵辱するとき、彼の疲労しきった肉体を駆り立てるものは、渴いた生理の必要ではなくて、むしろその思想なのだ²⁷。

これは「棗の木の下」で、八路軍の女性捕虜を性の対象として意識した古賀が、自分の気持を分析するくだりである。ここでは強姦を誘発するのは生理ではなく、相手の生命に対する絶対的な支配意識であるとしている。また別な箇所には「古賀のような男にとっては、女を抱くためには、憎悪が必要なのだ」ともあるが、これも言葉を変えた同じ説明といえるだろう。このように、強姦が主人公の頭の中で語られている「棗の木の下」では、強姦者の心理について、まだしも理解可能な説明がされている。

それが、主人公の世古が強姦者である「砂」になると、言葉よっての説明が空回りし、その隙間から奇妙な実感が露呈する。その混乱は、洲之内公館の連作と異なり、「砂」では作者と主人公である世古との距離が定まっていないところにあるのではないだろうか。作者の意図が、自分の分身として設定した世古に悪行をつかさねることにより、戦争の真の姿を暴きだすことにあったのか、それとも戦場の悪に身を委ねてゆく世古の内面の闇をつきつめることにあったのか、いずれにしても世古に対する位置どりが、どこか中途半端で、無責任なのだ。

作者は世古に「女を陵辱するのに何をこだわるであろう。人間そのものが気

紛れに、くだらなく浪費されているときに、その中のひとりが、他のひとりを辱めるとか、辱められるとかいうことに果して意味があるだろうか²⁸とつぶやかせる。そして、自己を含めて人間を辱めることが世古の偏執的な動機となり、それがさらに興奮と快感を増進したと説明する。

人間の命が無意味に浪費されている戦場において、正義や倫理に何の意味があるかという世古の問いかけはもっともである。しかし、「その中のひとりが、他のひとりを辱めるとか、辱められるとか」というときに、日本兵である自分は辱める側にいることがすっぽり抜け落ちている。さらに、「自己を含めて人間を辱める」と同じ言葉でひっくくってしまうことで、卑劣な犯罪を犯す自分とその犠牲者とを、人間の卑小さの中に一律に落とし込む。そのような弁解を自分に許すことで、世古は、そして作者も、中国の戦場を生き延びたのであったかもしれない。

しかし、ひとたび戦場を離れてその体験を文学にすると、そのような世古の論理は検証され、批判される必要がある。それには、世古を自分の分身としてその悪行を共に生ききるのか、あるいは突き放して描くのか、作者の位置を決める必要がある。そのどちらにも徹し切れなかい半端さが「砂」の後味の悪さとなったのではないか。

農会主任の妻を犯した翌日、世古は昨夜のことを思い出す。

部屋の中の闇と、窓に射す弦月の薄明りの融けあう夜の底で演じられたあの場面と、いまの彼の眼に映っている、早春の陽光に煙っている平野の風光とは、いっぽうを現実とすれば、他のいっぽうは到底現実とは信じられない、隔絶した二つの世界であったが、彼の掌や下腹部に残っている感触の生なましさは、あの夜の場面こそ彼にとっての現実なのだということを、否応なしに彼に認めさせないではおかない。あれが地獄なら、彼は確実に地獄の眷属なのだ。俺は地獄へ堕ちた、二度と後返りはできない、と世古は思った²⁹。

地獄へ堕ちたという言葉は厳しいが、この言葉は十分な重みを持っていない。むしろ、性犯罪者であり殺人者である世古を許してしまう甘さを含んでいる。

3. 「砂」への批判と分析

洲之内徹は、「棗の木の下」で第23回（1950年上半期）芥川賞の候補になったが落

選し、次回の24回では「砂」が候補に選ばれた。『文藝春秋』1950年10月号の選者評で、宇野浩二は、「世古という主人公だけをよい子にした、独りよがりの小説」と厳しい批評をしている。選者の中には作者の力量を評価する者もいたのだが、結局受賞作なしとなったのは、この作品の底にある作者のモラルに対する違和感が、かなりの選者に共有されていたからではなかったか。

洲之内徹の小説は、長いあいだ忘れられていた。再読され、批評が書かれるようになったのは、エッセイストとして洲之内の名が知られるようになってからである。代表的な批評としては、『絵のなかの散歩』文庫版に付された車谷長吉の「洲之内徹の狷介」がある。車谷は、洲之内徹が再三芥川賞の候補となりながら受賞を果たさなかった理由として、小説というのは虚実皮膜の間に成立するものであるが、洲之内の小説には「実」だけがあって「虚」がない、すなわち作者の「命懸けの嘘」が欠けているとする。そして、日本皇軍の悪の限りを尽くす生態を容赦なく描いた「砂」を重要な作品としてとりあげるが、その描写については厳しい批判を投げかける。

通常はここまで「悪」の姿を突き詰めて行けば、その文章の彼方に、彼岸の「浄土の光」が射して来るものだが、併し洲之内の「砂」では射して来なかった。(中略)そこには「悪」の自覚によって当然生ずるであろう、人間内面の倫理的・宗教的葛藤が皆無なのである。いや、戦争とはそのような倫理的・宗教的葛藤を、底深い麻痺させてしまうものだ、と洲之内は言いたかったのかも知れない。そうであるならば、その謎を主題テーマとすべきではなかったか³⁰。

車谷は、洲之内が「人が人であることの謎」を「砂」という小説で突き詰めることができなかつたとする。しかし、小説を断念し、絵画に向きあつたときに、彼はその謎と本気で取り組むようになった。その意味で「砂」において人間の悪を見据えたことが、美術エッセイにおける独特の文章と方法とを生んだというのが車谷の洲之内論の結論である。

「砂」の小説としての失敗の原因を、「悪」を徹底して突き詰めることができなかつたことにあるとする車谷の論は明快である。ただ、車谷の説明は「悪」全般の説明としては十分だが、私が特にこだわりを感じた性暴力の描き方については、まだ納得できないものが残る。それを解き明かしてくれるものとして、大原富枝による洲之内徹の評伝『彼もまた神の愛でし子か』がある。これは、長年にわたる友人としての理解と、厳しい批判とがバランスを保った、見事な評伝文学である。

大原は、戦前から松山で洲之内徹と共に同人誌『記録』に依った文学仲間であり、彼の死までの友人であった。それと同時に、文学者としてだけでなく、性犯罪の被害者の側にある女としての眼で、洲之内の内面にひそむ人間的な欠陥——ある種の残虐性、サディズムのようなもの——を見抜いていた。美術や工芸なら、作者がアン・ヒューマンであろうとも、作品は作者の人格とは独立して万人に受入れられる。しかし、文学の場合は作者の頭脳の直接の営為であり、それがあまりにもアン・ヒューマンであることは読者に許されない、洲之内の文学が受入れられなかったのはそのためなのだ和大原は考える。

洲之内の非人間性は「瞬時性とも、発作的とも言える場合も多かったかもしれない。しかし、永続的な点線であり、確実に相手を傷つけた。／相手だけではない。それは両刃の剣であり、彼自身をも傷つけた。彼があれほど愛好し、執着しつづけた彼の文学をさえ虐殺した」³¹。

私生活における洲之内は、中国からともに引揚げてきた妻子をおいて恋愛遍歴をつづけ、生涯すくなくとも4人の女性に子を産ませている。「こと、女に関しては、洲之内徹のなかには、悪魔的と言っていい、救いようのない地獄があった、とわたしは思う」³²。

「砂」の強姦描写の中に見え隠れする不気味さ、おぞましさは、この救いのない地獄が顔を見せていたものだとすれば、なるほどとうなずくことができる。

作者の中に生来潜む女性に対する残虐さが、戦争の残虐さと共鳴してしまったことが、小説「砂」を大原のいうアン・ヒューマンなものに、読者に受け入れ難いものにした。車谷が「実」だけあって「虚」がないといったのは、その共鳴を作者が認識し分析して文学として昇華することができなかつたという意味かもしれない。とはいえ、これが小説としてあきらかに失敗であるとしても、中国戦線における日本軍の残虐、とりわけ加害者の側から書かれることの少なかつた戦場強姦の「実」を詳述した記録として、やはり貴重なものである。

また、洲之内が複数の女性と世間の常識から逸脱した関わりをもち、妻を含めた多くの女性を傷つけたことは、本人も小説においてはあからさまに、エッセイではさらりと語っている。ただそれらの関係は、結果的に相手を深く傷つけたにしても、高揚期にあつては相手の女性にも恋愛と意識されていたもので、戦場における一方的な強姦とは次元を異にしている。その意味では洲之内も、平時には善良な息子や夫であつた他の皇軍兵士たちと同じく、戦争に駆り出されたために己のうちに潜む残虐さを抑えるすべを失い、残りの生涯をその結果を負いつつ生きなければならな

かったという点では被害者であったといえる。

洲之内が、結果としては自分を文壇から遠ざけることになった「砂」のような作品を書いたのは、偶然ではなく、復讐されたのではなかったかと大原は示唆している。「復讐するのは、虫けらのように踏みにじられた人間の怨念ではない。踏みにじり、虐殺した人間の地獄である。それを文学として書き綴った、その同じ手である」³³。

IV おわりに

8年にわたる中国生活の中で、洲之内徹は異なる顔を使い分けて生き、その体験をいくつかの小説に結実させた。洲之内公館三連作の中には、左翼活動による逮捕歴という傷を抱いて自らの思想とは相反する日本軍のために情報収集をする主人公と、心ならずも国と思想とを裏切って日本のために働くことになった中国人との心のふれあいがこまやかに描かれている。「砂」では同じ作者の分身が、戦場の殺戮者、強姦者として、その悪行の数々をおこなうさまが、そのまま投げ出すように描かれている。そして、どの作品にも、日中戦争期の中国西北部の、日常生活と戦争とが境界なく入り混った様相が、具体的にきめ細かく語られていて、中国に関心を持つものにとっては貴重な資料となっている。

洲之内徹と中国との関係については、興味深いエピソードは他にもいろいろある。ここでは紙数もないので、簡単に列挙するにとどめよう。

まだ中国に渡る前、左翼活動をしていた1931年ごろ、洲之内は上海から来ていた女性の共産青年同盟員を部屋に泊めたことがあり、彼女が池田幸子だと後で知ったという。池田幸子は中国研究者には知られた名で、上海で作家鹿地亘と結婚し、魯迅や東北出身作家の蕭軍・蕭紅夫妻と親しくつきあった。日中戦争勃発後は、重慶で日本人反戦同盟を組織した鹿地と行動を共にした。池田と洲之内は同じ時期の中国で、戦線の反対側にいたことになる。洲之内は、「私のベッドをその女性に提供して、私は床で寝ているのだが、夜更けにアパートの前の道路で支那そばのチャルメラの音が聞こえると、その人はベッドの上から、『ダンナ、そば食いに行こうか』と私に声を掛けて、二人で四階から階段を降りて行ったりした」と、当時の日本女性としては桁外れな池田の個性を巧みにスケッチしている³⁴。

中国文学とのかかわりも、興味深い。北京の参謀本部勤務時代の洲之内は、作家丁玲が青春時代に住んでいた北京大学のそばの学生向けアパートに暮らしたことがあり、それを「丁玲の家」というエッセイにして、郷里松山の同人誌『記録』に送

っている。

洲之内公館では中国共産党側の資料を手にする機会も多く、日中双方の文学に関心のある人の出入りもあった。「鳶」には、中国文学に造詣の深い新聞社の支局長から、蕭軍の小説を記念に贈られる場面がある。日本軍が占領した当時の山西省臨汾からの脱出記だというその小説は『側面——臨汾から延安へ』にちがいない。

共産党解放区から登場し、新中国の代表的作家となった趙樹理についても、洲之内は太原時代に存在を知り、作品も読んでいたということだ。そんなことが縁になったのか、竹内好や武田泰淳によって戦後まもなく再開された中国文学研究会の例会にも顔を出している。

「私がなぜそんなところへ行くようになったかはよくわからないし、私なんか行ってもしょうがないのだったが、小野忍氏がちょうど、あちらの誰か新しい作家の小説の翻訳をしていて、抗日戦中の華北の行政単位だの、共産軍の給与制度などで、小野氏が判らなくて困っていることを、私が教えてあげられるというようなことはあった」³⁵。

小野忍は1960年代東大中国文学科の主任教授で、じつは私の指導教官である。趙樹理作・小野忍訳『結婚登記』は1953年岩波新書として刊行されている。

しかし、中国文学者らとの交流は戦後の一時期だけだったようで、その後の洲之内は中国とはほとんどかかわりなく過ごしている。

「季節の変わり目、たとえば夏の終わりのある日、膚に触れる風がさらりとかわいて冷たいのに気がついて、もう秋がきているのを感じるときだとか、まだ強い北風が吹いているのに、ふと太陽の光線が明るく、まぶしく見えて、春の近いのを知らされるときなど、私はふしぎに中国のことを思いだす」と、「私の身うちにしみとおっている中国への根強い郷愁」に触れた文章はある³⁶。

あるいは、文化大革命の時期には、「老舎が自殺し、巴金も、丁玲も、趙樹理も、その他、新中国の担い手のように見えていた誰彼がいちどに姿を消してしまい、生死の程も判らないということになると、これはもう本当に、私には理解できない」と、ごくまっとうな感想を述べ、日中友好活動に入れこんで絵のほうがお留守になってしまった画家高良真木の才能を惜しんだりしている³⁷。

しかし、中国へ行かないかと誘われたとき、洲之内はきっぱりと断ったという。中国への郷愁がいかに身のうちにしみとおっていようと、その地に足を踏み入れることを彼は自分自身に許すことができなかつたにちがいない。

参考文献

- 青江舜二郎『大日本軍宣撫官——ある青春の記録』芙蓉書房，1970年
- 秋山洋子「田村泰次郎が描いた〈貞貞〉——『肉体の悪魔』再読」『中国女性史研究』第19号，2010年
- 石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力——大娘たちの戦争は終わらない』創土社，2004年
- 大原富枝『彼もまた神の愛でし子か——洲之内徹の生涯』講談社，1989年（ウエッジ文庫，2008年）
- 須之内徹・関川夏央・丹尾安典・大倉宏ほか『須之内徹 絵のある一生』新潮社，2007年
- 児玉直起「洲之内徹と戦争——戦争文化論（Ⅱ）」『東京国際大学論叢 人間社会学部編』第9号（通巻60号），2003年9月
- 田村泰次郎「戦場の顔」『文藝』，1951年3月号

洲之内徹の著作

- 『洲之内徹文学集成』月曜社，2008年
- 『絵のなかの散歩』新潮社，1973年（新潮文庫，1998年）
- 『気まぐれ美術館』新潮社，1978年（新潮文庫，1996年）
- 『帰りたい風景 気まぐれ美術館』1980年（新潮文庫1999年）
- 『セザンヌの塗り残し 気まぐれ美術館』新潮社，1983年
- 『人魚を見た人 気まぐれ美術館』新潮社，1985年
- 『さらば気まぐれ美術館』新潮社，1988年
- 『芸術随想 おいてけぼり』世界文化社，2004年

-
- 1) 宮城県美術館パンフレット『美術館散歩Ⅱ 洲之内コレクション』（1995）。筆者は学会で仙台を訪れた際に同館収蔵の洲之内コレクションを見た記憶があるが、パンフレットを購入したことは忘れており、研究室でみつけたときには驚いた。
 - 2) 筆者はこれに触発され、研究ノート「田村泰次郎が描いた〈貞貞〉——『肉体の悪魔』再読」（2010）を書いた。
 - 3) 田村泰次郎「戦場の顔」，『文藝』，1951年3月号。

- 4) 洲之内徹の戦争文学を正面から論じた論文としては、児玉直起「洲之内徹と戦争——戦争文化論Ⅱ」がある。
- 5) 基本的な伝記事項は、『洲之内徹文学集成』の「解説ノート」(大倉宏, 大西香織)によった。
- 6) 中国における日本軍宣撫官の活動については、青江舜二郎『大日本軍宣撫官』があり、同書には洲之内徹も登場する。
- 7) 「銃について」『帰りたい風景』。(『気まぐれ美術館』シリーズには単行本と文庫本があり、収録エッセイ各編は短いので、ページ数は表記しない。)
- 8) 三光はふつう「殺光, 焼光, 槍^{チアングロソ}光(奪い尽す)」といわれている。ただ、正式な作戦名というわけではないから、人により記憶に違いがあるかもしれない。
- 9) 「海老原喜之助『ポアソニエール』」『絵の中の散歩』。
- 10) 同上。
- 11) 同上。なお、このとき北支派遣軍第一軍上層部と国民党軍との取引により山西省に残留した日本将兵2600人は、国共内戦で国民党軍として戦い、550人が戦死したが、終戦時に現地除隊したとされ、この期間は軍歴とはみなされず、恩給の対象にもなっていない。それを不当とした元兵士たちは国を訴えている(池谷薫『蟻の兵隊』新潮社、2007年)。洲之内は、太原陥落に際して「いちばん勇敢に戦ったのは日本人部隊だったということだが、聞いてみると、かつての私の知人だった参謀や将校たち、下士官などの大方がその戦闘で死んでいた」と述べている(「銃について」『帰りたい風景』)。
- 12) 以前の出版としては、小説集『棗の木の下』現代書房、1966年、『洲之内徹小説全集』全二巻、白川書院、1983年がある。本論の引用は、『洲之内徹文学集成』によった。
- 13) 『集成』掲載順に「鳶」, 「流氓」, 「棗の木の下」, 「砂」, 「瓶の中の魚」である。発表時期は「鳶」の1948年から「瓶の中の魚」の1955年まで掲載順であるが、執筆から発表まで時間が経っているもの、改稿・改題を経たものなど複雑である。
- 14) 「鳶」, 『洲之内徹文学集成』, p. 30。
- 15) 「鳶」, 『洲之内徹文学集成』, p. 13。
- 16) 「棗の木の下」, 『洲之内徹文学集成』, p. 150。
- 17) 「鳶」, 『洲之内徹文学集成』, p. 14。
- 18) 洲之内の「作品ノート 1」(『集成』p. 502)によると、この「A新聞支局長」は、朝日新聞太原支局長であった須田禎一である。須田は中国文学にも造詣が深

く、戦後は北海道新聞の論説委員として筋の通った論陣を張ると同時に、郭沫若の翻訳や、『風見章とその時代』などの著作でも知られている。洲之内は実際に起こったこの事件の顛末を須田に報告しようとする手紙を書き始めたが、小説にしたかどうかと聞いたのだという。

- 19) 「鳶」, 『洲之内徹文学集成』, p. 43。
- 20) 「流氓」, 『洲之内徹文学集成』, p. 109。
- 21) 「曹良圭『マンホール B』『絵の中の散歩』。
- 22) 「討伐」は日本軍の作戦用語で、ゲリラ戦を展開する敵を一掃して占領地域を安定させる目的で行われる。日本軍の立場から使われる用語という意味で初出に「 」をつけた。
- 23) 「砂」, 『洲之内徹文学集成』, p. 192。
- 24) 同上, p. 218。
- 25) 同上, p. 225。
- 26) 同上, p. 195。
- 27) 「棗の木の下」, 『洲之内徹文学集成』, p. 135-136。
- 28) 「砂」, 『洲之内徹文学集成』, p. 195-196。
- 29) 同上, p. 223。
- 30) 車谷長吉「洲之内徹の狷介」, 『絵の中の散歩』新潮文庫解説, 1998年。
- 31) 大原富枝『彼もまた神の愛でし子か——洲之内徹の生涯』文庫版, p. 126。
- 32) 同上, p. 185。
- 33) 同上, p. 95。
- 34) 「エノケンさんにあげようと思った絵」, 『気まぐれ美術館』。
- 35) 「続海辺の墓」, 『帰りたい風景』。
- 36) 「新聞版 気まぐれ美術館 梅原龍三郎『姑娘紅樓』『芸術随想 おいてきぼり』。
- 37) 「小田原と真鶴の間」『気まぐれ美術館』。